

第11回「日本語大賞」

テーマ「おもしろい日本語」

中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

「『虫』だっていいじゃない」

静岡県

静岡大学教育学部附属静岡中学校

3年 南雲 円香

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「虫」だっていいじゃない

静岡大学教育学部附属静岡中学校 三年

南雲 円香(なぐも・まどか)

私は知ることが好きだ。知らないことを学んだり、それに対する考察をしたりすると自分の世界が広がった気がして嬉しくなる。だから勉強も苦ではない。しかし、「勉強が楽しい。」なんて大きな声では言えないし、クラスメートの前で授業内容以外の勉強をする姿を見せるのは、少しはばかられる。それはなぜか。「カッコ悪い」からだ。ただでさえ眼鏡をかけた私は「真面目」というレッテルを貼られやすい。できれば、これ以上優等生のようなイメージはつくりたくない。勉強関連の本などは、友達と会うことが少ない電車の中で読んでいる。

「本の虫って本当にいるんだよ。」

ある日、私が「本の虫」という言葉について母と話をしているとき、そう返された。調べてみると、どうやら古い本のページとページの間に生息していて、「紙魚」とか「チャタテムシ」と呼ばれる虫がいるらしい。私はまだ一度も見たことはないが、「紙魚」という字面から推測するに、人から嫌われている虫ではなさそうだ。ところで、英語では「本の虫」を「bookworm」と言う。遠く離れた外国でも本の中に虫が生息していて、同じ表現で呼ばれていることも面白いが、その意味するところが誉め言葉ではなく、どちらかというと「四六時中本ばかり読んでいてつまらない人」を指す時に使う言葉とこのも共通していることが興味深い。

「○○の虫」という言葉は他にもある。仕事の虫、勉強の虫…。類語を考えていると「あれ?」と思った。なぜ「料理の虫」や「スポーツの虫」とは言わないのだろう。辞書を引いてみると、「虫」の意味の一つに「ものごとくに熱中する人。」とある。勉強だろうが、スポーツだろうが熱中していることに変わりはない。そこで私は一つの仮説をたてた。

人は無意識に「熱中する対象」を「カッコ良い」と「カッコ悪い」に分別しているのかもしれない。料理をしてごちそうを振る舞ったり、スポーツをして汗を流したりすることは華やかで爽やかなこと。勉強や読書をするごとは暗くてつまらないこと。そう考えると、勉強をする自分に対して「カッコ悪い」と感じている自分がいるのも合点がいく。クラスでも、さも勉強していないかのように振る舞っている人をよく見かける。

「やっぱり勉強の虫とか本の虫って、周りからカッコ悪いって思われるよね。」
と母に聞いてみた。すると母は

「何言ってるの。今の世の中は、本の虫とか、パソコンの虫とか、ゲームの虫とか、そういうオタクの力で経済がまわっているのよ。ビル・ゲイツだって学生時代はコンピューターオタクで周囲から敬遠されていたのに、今は大富豪でしょ。」

と言った。私はなぜか自分が肯定されたような気がした。「虫」という言葉は確かに、あまり良い意味を持たない。しかし、虫は一つのことを真面目にコツコツとこなしている。ただ、それが地味なだけなのだ。決して誰かにチャホヤされるためではなく、まるで自分の使命とでも言うかのように全力でその道突き進んでいる。その積み重ねこそが、「虫」を世界に羽ばたく蝶に変えることもある。

同質社会では、自分とは違う異質の人々を「虫」と呼ぶのかもしれない。しかし、それが何だと言うのだ。自分が楽しいと思えることに夢中になったってよいではないか。そう開き直つてみると、自分が本の虫だって、勉強の虫だって良い気がしてきた。

蝶に化けるかもしれない私の「虫」を堂々と大事に育てたいと思う。